日本中世の災害と思想

上川通夫

はじめに

みなさんこんにちは。日本の愛知県から来ました、上川通夫です。

今日は、この大学の皆さんとの交流として、日本の歴史について話をさせていただくことになりました。とてもうれしく思います。

さて、私の専門分野は、日本中世史です。日本史の場合、中世は、11世紀後半から16世紀を指すのが一般です。その中でも今日は、12世紀のことを中心にお話しします。古代が終わり、中世の新しい時代の枠組みが確立した時代です。古代国家を解体させた民衆の底力が、仏教という普遍宗教と結びついて歴史の表面に現れました。

今日は、特には、「災害と思想」というテーマで歴史を探ります。今から800年も前のことですが、決して過ぎ去った昔話ではありません。ご承知のように、最近日本で起こった大震災の経験や、今後に予測される自然の猛威など、重大な関心事の一部として、歴史を心に刻みたいと考えています。

一　日本列島と日本中世史への視点

最初に、二つの地図を見てください。一つは「世界の震源分布」、もう一つは「日本の地震活動」というタイトルが付けられています。ともに、東京大学地震研究所が今年作成したものです。

まず【図１】「世界の震源分布」をご覧ください。太平洋を囲む地域の部分をコピーしました。環太平洋地域は震源地として数珠つなぎである、ということが見事に示されています。震源地分布としてのつながりは、日本列島と南米という、地球の対局をつないでいます。それは、地図上のつながりというにとどまりません。たとえば、1960年５月（たまたま私の生まれた月です）には、チリ沖でマグニチュード九ほどの地震が起こり、その影響で津波が各地に押し寄せ、日本には約22時間半後に襲来しました。三陸海岸沿岸を中心に、142名

が死亡したということで、今もよく語り継がれています。ブラジルに震源地が少ないのは幸いです。しかし、地震以外にも目を向けた場合、公害、地球温暖化、オゾンホールの破壊、核など、それが存在する限り、今日ではどこに住んでいても逃れられない問題があることに、思いを新たにしなければなりません。

次に、もう一枚の地図、【図２】「日本の地震活動」を見てください。1900年以降の地震を記したものです。被害のあった地震の143件については、特に大きい赤丸で示されています。今年の３月11日に起こった大地震は、東北地方の太平洋沖が震源です。141番目の数字が付けられています。マグニチュード９です。地震そのものや、すぐあとに起こった津波など、すさまじい威力が、甚大な被害をもたらしました。

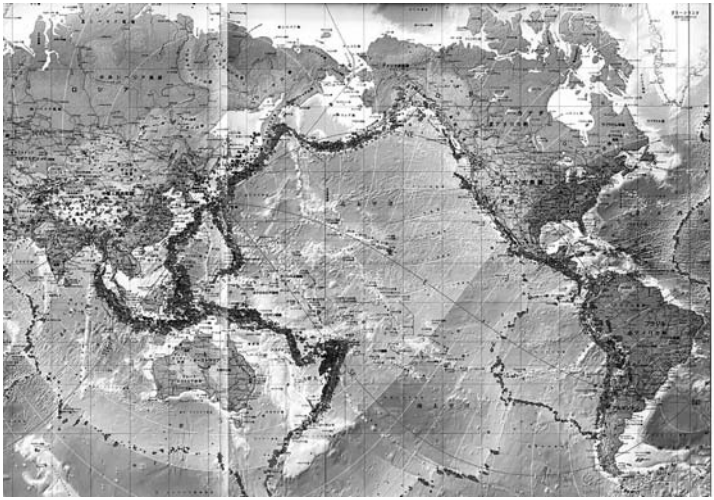
ただ、この地図を眺めますと、この100年余りのデータによっても、決して突発的な、あり得ない地震ではなかったことに気づきます。そのことをまじめに考えますと、日本の原子力発電所は18か所あり、原子炉は55か所あることについて、今更ながら理解に苦しむと言わねばなりません。ブラジルにある原子炉数は３基だそうですが、日本の原子炉数は世界の総数の一割以上です。

一方、今年の東北大地震に匹敵する規模のものが、過去に探されました。その結果、869年に東北地方で大地震があり、大津波で1,000人が溺死した、という事実が省みられています（『日本三代実録』貞観11年５月26日条）。そこで、2011年の地震や大津波について、「千年に一度」という表現が定着しつつあります。

この分野の研究はなおも未熟です[*1]。ただ、現代や将来の問題を考える場合、過去の長い歴史的時間の幅で考えることが必要である、という意見に説得力を与えていると思います。

以上、ここまで、地球上の広い地理的範囲で考えることと、長い歴史的時間幅で考えること、両方の必要性を述べました。まとめていうと、世界史的な視野をもつことの大事さ、ということになります。

そのようなことを念頭に置きながら、日本中世史について、近年注目されている災害史研究について紹介します。最近の書物で、サンパウロ大学の日本文化研究所にも是非入れていただきたいものを紹介いたします。



【図１】世界の震源分布（東京大学地震研究所、2011年、部分、現物はカラー）

【図２】日本の地震活動（東京大学地震研究所、2011年、部分、現物はカラー）

藤木久志編『日本中世気象災害史年表稿』（2007年、高志書院）は、基礎的史料を博捜し、インデックスとして時代順に配列した、大部な年表です。古い時代の日本語文献を引用するこの年表は、愛知県立大学の学生にもやや難解なようです。しかし、意志ある知的営みの担い手には、絶大な威力を与えるはずです。

この年表を作られた藤木久志さんには、『飢餓と戦争の戦国を行く』(2001年、朝日選書）という主に16世紀をあつかった本もあります。戦国時代といえば、天下統一を目指す武士たちの、英雄的な行動が理想化され、一般には人気のある時代です。しかし本当は、飢餓・戦争・略奪の過酷さの中で民衆が生き抜いたこと、また戦場で女性を対象とする奴隷狩りがあったこと、などが描かれています。

峰岸純夫『中世 災害・戦乱の社会史』（2001年、吉川弘文館）は、藤木久志さんの研究と双璧です。地震のみならず、火山国である日本列島の自然環境が、紛争・戦乱や社会構成の枠組みと関係する事例などが、民衆側の視点から具体的に論じられています。

災害や環境による人間社会への影響は、一方的なものではありません。社会や政治の仕組みが、影響を増幅させたり食い止めたりします。たとえば、飢饉によって餓死者は大量に発生しましたが、ほとんどの場合、支配者階級は餓死しません。一般民衆が餓死しました。この点、影響は明らかに不平等です。12世紀の後半に勃発した戦争の場合、その真っ最中に大規模な飢饉が発生しています。民衆は、普段の年貢に加えて、臨時の軍事費と軍事動員を課されました。その上に大飢饉が発生したのですから、壮絶な事態がもたらされたようです。

さらに紹介したいのは、勝田至『死者たちの中世』（2003年、吉川弘文館）という研究書です。そこでは、死や死体に対する観念、葬式や墓場の具体相など、今日の常識と異なる事実が浮き彫りにされています。この本には、「中世京都死体遺棄年表」という付録が付いています。京都といえば、今日では「古都」とも言われ、古き良き伝統文化の中心地、と考えられがちです。しかし12世紀の実態は、天候不順と全国的な飢饉によって、餓死者をもっとも多く出し、捨てられた死体の悪臭が渦巻く世界だったことがわかります。この研究は、生

きる権利が保障された現代人の意表を衝いています。現在の日本でも、自由競争と格差社会の進展によって、社会や国家の仕組みが人間の生存を保障する機能をもっているか否かが問われています。そのことを歴史に問う研究だと思います。

二　大飢饉と首都平安京

もう少し事実に即したお話を致します。ここでは、先ほど少し触れた、12世紀の京都（平安京）を探ってみます。この時代の京都は、政治や経済の中心でした。日本の首都と言えます。10万人の人口を抱えた、一大消費都市だったことを念頭に置いてください。

1180年から1185年にかけて、日本列島は国内戦争を経験しました。一般には源平合戦として知られています。その中から、鎌倉幕府と呼ばれる、日本史上最初の武人政権が成立することになります。

実はその途中、1181年と1182年に、深刻な飢饉が列島を襲っています。旱魃によって大飢饉が発生しました。当時の日本の年号は「養和」といいましたので、養和の大飢饉と呼ばれています。餓死者が大量発生したことは、たくさんの記録によって確かめることができます。生産地の地方民衆は、重ねて軍事費の徴発を命じられていて、顔色を失っていました[*2]。同時に、消費都市である京都は、惨憺たる有様でした。次のような記録があります。

> 1181年４月５日　貴族の吉田経房は、天皇の居所（内裏）を退出して都の街路（三条烏丸（からすま））を通って帰ろうと思ったが、餓死者の８人の死体があると聞いて、そこを避けた。近日、死骸が道路に満ちているということだ。（『吉記』）

この史料によりますと、メインストリートに餓死者が放置されています。当時天皇は神聖さの象徴でした。貴族たちは、死人に“穢れ”があると考えて、その伝染を恐れていたのです。

1182年２月３日　退位した天皇（後白河上皇）の居所の門内で、乞食法師が餓死していた。（『玉葉』）

この史料は、敷地内での由々しきできごととして記録されています。餓死者の数は、外部にはもっと多いはずです。

1182年２月22日　都の東を流れる川のほとり（五条河原辺）で、死人を食べる者がいるという噂がある。（『吉記』）

鴨川の河原には、餓死者の死体がたくさん捨てられていました。

1182年３月25日　最近、強盗による放火が連日連夜起きている。世の中の運命は尽きてしまったかのようだ。死骸が道路に充満している。悲しいことだ。（『吉記』）

この史料からは、都の治安悪化が深刻化していることがわかります。

ここに挙げたのは事実の一部です。私たちは、これら貴族の日記に書かれた断片的な情報から、書かれていない事実を合理的に推理する必要があります。権力者に排除されるはずの場所にまで登場した餓死者の死体は、庶民の住む空間に死体があふれていたことを訴えるかのようです。河原には、埋葬されなかった餓死者の遺骸がどれぐらい捨てられていたのでしょうか。

実は、このことについて、幸いにも下級貴族が詳しい記録を残しています。古典文学作品として著名な、鴨長明の『方丈記』がそれです。『方丈記』は、日本の高校では、古文のテキストとして読まれています。人間世界の無情を感じた著者が、人里を避けて生活する道を選ぶにいたった経緯と心情を、思慮深い文章にした作品です。その冒頭には、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。……」（流れて行く川の流れは絶えないのであるが、しかし、その川の流れをなしている水は刻々に移って、もとの水ではないのだ[*3)]）

とあります。しかしここでは、あまり引用されていない箇所に、注目いたします。

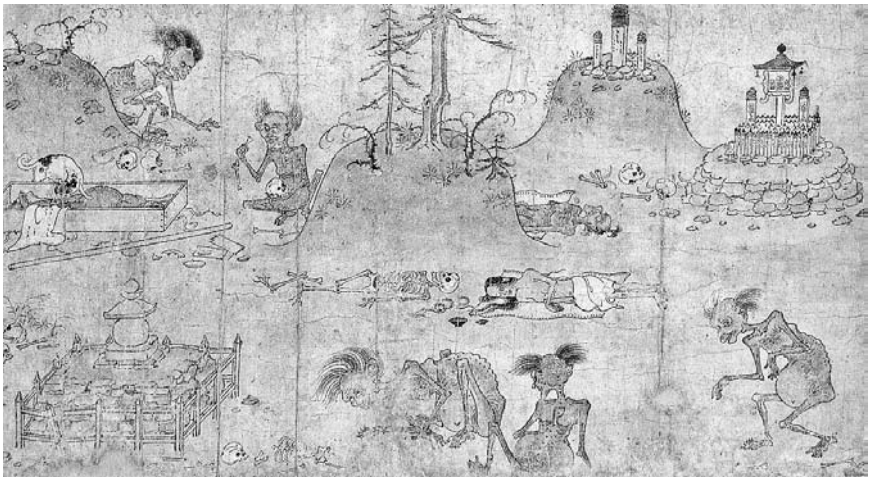
著者の鴨長明が京都で体験した災害は、飢饉だけではありません。1177年4月の京都大火災、1180年4月の京都つむじ風、1185年7月の大地震などにも触れています*4。彼は、「まったく人間の世界は暮らしにくい」(「すべて世の中のありにくく…」)、と言っています。そして、大飢饉は、次のように書かれています。

> 養和のころだったかと思うが、…二か年の間、どこもかしこも飢饉になって、あきれるようなひどい事態だった。ある年は、春と夏に旱魃、ある年は、秋と冬に大風と洪水とか、わるいことがつぎつぎに続いて、農作物は全然みのらない。…
>
> 朝廷では、いろいろな御祈祷がはじまり、特別念入りの修法がとり行われたけれど、さっぱりその効果がない。京都の経済というものは、いつも、何によらず、根源は、地方に依存しているのに、まったく送り込まれるものがないものだから、こうなると、とても平常時のような体裁をつくろってなんかいられやしない。…乞食が都大路にいっぱいになり、不平と嘆息がやたらに聞こえてくる。
>
> 築地のそばや道ばたで、餓死しているものの数は大したものだ。その死骸を片づけようともしないので、臭気が京都中にいっぱいになり、腐爛していく様子は、あっちもこっちも、とても目を向けられたもんじゃあない。鴨の河原なんかには、死骸の山で、馬や車の行き来する道もないくらいだ。
>
> …仁和寺にいた隆暁法印という人は、死んだ人の数をしらべようとして、4月と5月の2か月間を数えたところが、京都の中で、…左京全体の道のあたりの死人の頭(かしら)は、合計4万2千3百あまりあったのだ。

このように書かれています。大事なことがいくつかわかります。第一に、この大飢饉は、自然災害と言い切れないことです。一大消費地で、人口流入の顕著な、首都で増幅された災害です。第二に、合理的で有効な復興対策がとられ

た形跡のないことです。朝廷は、天皇の命令で神仏への祈りを捧げさせましたが、何の効果もありませんでした。第三に、生きる庶民の不平や嘆息と、死んだ庶民の腐乱死体の臭気とが、今日にも訴え続ける、人間存在の本質理由への問いかけです。生存が保障されなかった大多数の人々の存在は、千年周期の大地震を認識する今日の私たちにとって、他人事とは思われません。

著者の鴨長明は、自然の力と時代の変化を見つめ、無力感を表明しつつ、ひっそり暮らす道を選びました。そこには、社会の将来を展望しようという、意志や理想が感じられません。実際、めだった復興事業がどこかで進められたようにもみえません。ただ、800年前の民衆は記録こそ残していませんが、生存を次世代につなぐ新しい営みが、じわじわと力を発揮しはじめたようです。次にそのことを探ります。【図３】



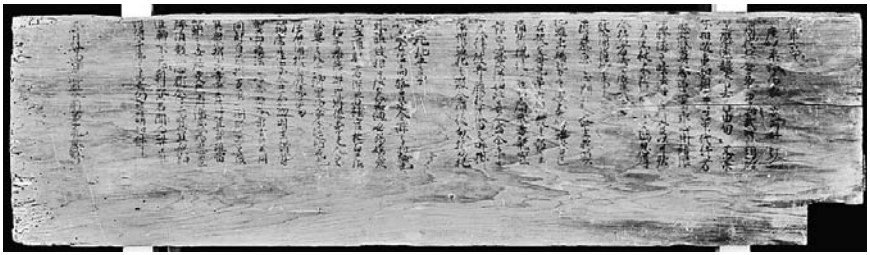
【図３】『餓鬼草紙』の一場面（墓場のようす）
（12世紀末期、東京国立博物館所蔵、奈良国立博物館特別展図録『美麗』2007年より）

三　普遍思想の水脈

ここでは二つの事実を紹介いたします。一つは、源平合戦や養和の大飢饉より前の、一地方での民衆の動きです。もう一つは、源平合戦や養和の大飢饉よ

り後の、混乱終息宣言ともいうべき政治権力者の発言です。

一つ目について。現在の愛知県の東側半分は、かつて三河国と呼ばれていました。その東の端に、普門寺という古い山寺があります。ここ数年、愛知県史編さん室による史料調査の後を受けて、愛知県立大学の学生と一緒に、そこに残された古文書の調査を続けています。この普門寺から、近年、1161年（永暦２）の古文書が発見されました。板に書かれています。【図４】内容は、当時たくさんいた僧侶たちに対する、生活上の戒めです。この文書が作成されたきっかけは、近くに住む百姓たちによる、新しい村づくりにあります。彼らは、身内から僧侶を出して、普門寺に住ませることにしたようです。そして、普門寺で共同生活をする僧たちは、村人の結束を象徴する存在になりました。この文書は、そのような地域のようすを伝えています。



【図４】永意起請（きしょう）木札（愛知県普門寺文書）

内容について、少し立ち入って紹介します。ここで重視されているのは、仏教の戒律です。争い、殺害、盗み、姦淫などを起こさないよう、戒めています。それらは、道徳に近いものです。しかし、村人たちの歴史にとっては、やはり画期的です。仏教思想では、戒律を守る人々の集団は、平等で平和な結束力をもつと考えています。この古文書では、「和合」という言葉で表現しています。仏教用語では僧伽（さんが）とも言います。仏の前で、僧侶たちは平和と平等の結束を誓ったのですが、その背後には、地元村人たちの新しい生活づくりがあったはずです。呪術宗教への妄信などではありません。ここには、民衆による理想と意志が込められているのです。しかも、時代は、自然環境の悪化と、生きる手段をめぐる争奪が、戦争を引き起こしつつありました。ところがこの宣言文には、

「武勇」を押さえて、「慈悲」を大事にすべきことが謳われています。

このような思想は、古代インドの仏教の流れを汲むものです。しかし歴史の問題としては、12世紀の日本民衆が獲得した、ということこそ重要です。現実は厳しかったに違いありません。しかし、普遍思想の水脈が表れた、希望ある一場面として、やはり特筆すべきことだと思います。

つぎに、もう一つの具体事例です。普門寺に人々が集って平和を誓った後、時代は本格的な戦争に突入し、養和の大飢饉なども起こりました。戦争は、1185年に、一応の決着がつきました。その結果、関東地方に、武人政権が誕生しました。有名な、将軍源頼朝が率いる鎌倉幕府です。紛争や政治交渉はなお続きますが、1197年（建久８）に、将軍源頼朝は日本全国に平和を宣言する仏教行事の実施を命じました。大昔、インドのアショカ王は、釈迦の遺骨を納めた塔を84,000基もつくって、世界に広めたと言われています。そのことになぞらえて、源頼朝は、小型の塔を84,000基つくるよう地方武官に命じました。その完成と祈りの儀式は、1197年10月４日の午前11時を期して、日本各地の主要寺院で、一斉に行われました[*5]。

注目したいのは、源頼朝による趣旨説明です。彼は、40年間を回顧し、「すべての人が歓喜する平和の時代が来た」、と言っています。そして、次のように言っています。

> この間の戦争によって、死んだ者の数は「千万」に及ぶ。平家に軍事徴発され、陸地や海上で命を落とした者の恨みや悲しみは、今も消えていないだろう。仏の救いを、怨みを抱いた者たちと等しく分けあおう。聞くところでは、怨みをもって怨みに報いると、怨みは将来にわたって断ち切れない。徳をもって怨みに報いると、怨みは親しみに転じるという。

ここでは、敵味方の区別なく死者を弔うことで、怨みの連鎖を断ち切る、という思想が表されています。この時、源頼朝は、かつて後白河上皇が、自分の「罪障」を消すためだけに84,000基の塔を造らせたことを、はっきりと念頭に置いていたはずです。また頼朝は、敵対する平家との戦争について、「天に代

り」「神に通じて」の行動だとしていたようです[*6]。ここでの「天」や「神」とは、特定の権力者を神格化したものではありません。抽象的で一般的な絶対者です。つまり源頼朝は、神の下での平等を言っていると解釈できます。

ただ私は、源頼朝が人格者だったと言いたいのではありません。12世紀の末には、災害、飢饉、戦争という、日本列島を疲弊させた深刻な経験からの立ち直りが求められていました。そのような状況で、新興の武人政権が考慮しなければならなかった、新しい思想にこそ、注目したいと思います。

それは、釈迦の教えといった、仏教一般ではありません。中身のある、意志と理想を将来に求めるような、平和で平等な結束の思想は、三河国普門寺でのように、地方民衆の中から芽生え始めていました。それは、未熟で断片的であったかもしれません。しかし、大規模な災害と戦争の経験を挟んで、生存を保障する普遍思想への自覚を、支配者にも促した可能性があります。

私は、生きる庶民の不平や嘆息、死んだ庶民の遺棄死体、庶民に芽生えた平和と平等の結束思想こそが、新しい時代を用意させ始めたのだ、と考えます。

むすび

6500万年前、直径10kmもある巨大隕石がメキシコのユカタン半島に落ちました。恐竜はもちろん、生物の多くがこの時に死滅したという説があります[*7]。この話に比べると、私の話は、たかだか800年ほど前のことに過ぎません。

現在が6500万年前と違うのは、隕石の落下を事前に予測できる人間が居ることです。

現在が800年前と違うのは、平和と平等の連帯が、地球の両側の人間同士にも可能であることです。

6500万年前にも800年前にも、宇宙や地球の自然には、人間ごときに避けられない威力に満ちている点では、共通しています。しかし、生まれ出でた人間は、自らの存在理由を問ながら生き続ける、という課題を負っています。少なくとも、生存を危機に陥れるような、人工の威力などは、避けなければなりません。価値ある将来を展望するために、ここのところ私の頭から離れない歴史

上の問題について、考えるところをお話しいたしました。

ご静聴ありがとうございました。

【付記】

800年前の歴史について、日本とブラジルでは認識に大きな隔たりがあるかもしれないと感じた。ブラジルでは、独立より遙か以前であり、また文字言語による記録を欠いている。両方を比較することは容易でない。ただ、質問の中には、ヨーロッパ史を媒介とする比較史への視点を誘うものがあった。ヨーロッパでは14世紀に飢饉史料が現れること、その後の歴史が公共思想の展開ではなく、むしろ大航海時代に見られる私益追求に結びつくことが指摘され、日本史における比較史の研究蓄積を問うものであった。私達は、地球上の諸地域との比較を試みるべきなのであろう。

そのほかは、図版で示した『餓鬼草紙』の基礎的事項についての質問と、今春の東北大震災に関係する現状への関心とが目だった。『餓鬼草紙』については、絵画史料への関心と、仏教思想への違和感が、質問の中に感じられた。大震災への関心は様々だが、多くは現状についての問いである。中には、日本人はここから何を学んだのかという質問があり、印象深かった。また、ブラジルでは日本の震災についての話題はそれなりに多く、すでに入学試験の論述問題に出されたり、保険会社による講演会が催されたりしているとのことである。ただし、歴史の話には出会っていないとのことであった。

＊1　歴史学のとり組みについて、反省と展望の指針を促す発言として、『歴史学研究』884（2011年10月）の「緊急特集　東日本大震災・原発事故と歴史学」掲載の諸論文がある。

＊2　「近日諸国庄々兵粮米重有苛責。可被付使庁之使由、被下院宣。行隆朝臣沙汰也。上下失色事歟」（『吉記』養和二年三月十七日条）。

＊3　簗瀬一雄訳注『方丈記　付現代語訳』（1964年、角川文庫）によった。一部中略した。

＊4　鴨長明は、ほかに、1180年（治承四）６月の福原遷都を挙げている。

＊5　建久８年10月４日、安達親長五輪宝塔造立供養願文案（『兵庫県史　史料編中世３』1988年）。大山喬平「鎌倉幕府の西国御家人編成」（『歴史公論』５－３、1979年）参照。

＊6　「爰我君前右大将源朝臣代天討王敵、通神伏逆臣」。なお、源親長願文の解釈については、上川通夫「東アジア仏教世界と平家物語」（川合康編『歴史と古典　平家物語を読む』2009年、吉川弘文館）でも示した。

＊7　松井孝典『新版　再現！巨大隕石の衝突』（2009年、岩波書店）。